



弘津陽介研究員

速度や精度向上に向け、ゲノム解析センターが中心と

がんの原因となる遺伝子変異を調べる「がんゲノム医療」の進展で肺がん患者の治療成績が上向く中、山梨県立中央病院は検査の迅

なつて体制整備を進めてい
る。センターの弘津陽介チ
ーム研究員は「がんは遺伝
子の病気。遺伝子を追ひ、
相手を知ることが治療のス
タートになる」と話してい
る。

効な分子標的薬がある遺伝
子変異が見つかったとして
も、検査によっては使用で
きないことがある。この場
合、対応した別の検査を行
い、改めて遺伝子変異の存
在を確認する必要があると

もう1種類の検査を導入し
て院内の検査体制の強化を
図ることにしたという。
両検査は特性上、遺伝子
変異を発見できない可能性
がある。弘津研究員は「二
重にチェックすることがで

関し、同院の肺がん患者5
00人以上を対象にした全
ゲノム解析結果を基に分析
したところ、両検査では2
〜3%の「見逃し」が起きる
ことが分かった。

遺伝子変異二重にチェック 分析迅速化、精度が向上

弘津研究員によると、多
様な肺がんの遺伝子変異を
一度にまとめて調べる検査
は複数存在。それぞれ検査
結果に基づいて使用できる
薬剤は明確に定められてい
る。

いう。

肺がんの主な遺伝子変異
46種類をまとめて調べるこ
とができる検査を受けられ
る同院でも、こうしたケー
スは起きる。「外部に再検
査を委託すると時間がかか
る」と弘津研究員。今夏、

できれば、精度の向上も期待
できるのではないかと意
義を強調する。
同院は導入に先立ち、両
検査の精度を確認するシミ
ュレーションを行った。肺
がんの原因となる代表的な
遺伝子変異「EGFR」に

弘津研究員は「EGFR
には有効な薬があり、医療
従事者からすれば絶対に見
逃したくはない」と説明。
今年4月、同院が「がんゲ
ノム医療拠点病院」になつ
たことを踏まえ「全ゲノム
解析の結果も含めて治療
方針を検討する体制が整
えばさらに精度を向上させ
ることができると展望を
語る。

このため、仮に治療に有

る」と弘津研究員。今夏、

8月10日に掲載します。

8月10日に掲載します。